

# はなつの歳時記

高村 壽一

## 水稲王の碑

実るほど頭を垂れる稲穂かな

収穫の秋。金色の稲穂が一面に波を立たせている稲田は、日本の秋の景である。

稲の香に滴れたき眼を瞑るべし

福永新二

稲の原産地は東インド、東南アジアだ。日本には縄文時代末期に中国から伝播したことには異論がない。ただ、その経路については中国南部↓琉球諸島↓南九州、中国大陸↓朝鮮半島↓北九州などの説があり、近年の研究では、長江河口↓対馬海流↓北九州ルートも有力だという。1世紀初めには近畿地方に稲田があり、その後北上したが、北海道で稲作が本格化するのには明治時代に入ってからである。

ところで30年ほど前、日本の一老人が中国東北部(旧満州)へ渡り、米づくりの指導に乗り出した。これが大地に根づき、黒竜江省を米作中国一に仕立てた話は案外知られていない。老人の名を藤原長作という。

この秋の初め、私は東北アジアの視察チームに加わって、吉林省、黒竜江省を回っ

た。黒竜江省では藤原長作が「水稲王」と呼ばれ敬愛されていることを知った。「美味い白米を食べられるようになったのは、水稲王のおかげだ」という。

長作は1912年(大正元年)岩手県和賀郡沢内村で生まれた。花巻市の西方、奥羽山脈の裾にある高冷山村の貧農の次男で、小学校を出ると農作に従事した。昭和恐慌下の閉塞状況で一時彼はブラジル移民を志すが、世は最悪の戦争時代に突入、夢は叶わなかった。

小作農が解放された戦後、農業の改善、水稲技術の向上にあれやこれやと試す。とりわけ簡易温床苗床(苗代を木枠で囲いレイヨン紙で覆う)に熱中する。のちに油紙を用いて高冷地の早植えに画期的な成果を上げた。1956年(昭和31年)東北地方の増産躍進賞を受賞、「隠れた米づくりの名人」となった。43歳のときである。

さあこれからというときに、米余り、減反政策がとられた。田植え機械もあつという間に農村に普及した。酒好きの長作は呑

んだくれた。

そんなとき彼を揺り動かしたのが「満州で米づくりはできないか」という岩手北端の開拓者のひと言。閃くものがあつて中国を視察した。職人の勤が働き、訪中を続け、1981年(昭和56年)、ハルビン東南180キロの方正県で寒冷地稲作稀植方式の日本産種籾の藤原氏式試田が設定された。

長作は70歳になっていた。試田は狙いどおりの成果を上げ、「トウモロコシや高粱ではなく、米が食べられる」と喜んだ県は遠来の長作に招待所(宿泊施設)を用意したが、彼は「農民は農家で」と辞退した。試田は急速に増え、東北三省に知れ渡った。佳木斯、牡丹江でも藤原方式で収穫を上げた。方正県は彼を名誉県民とした。長作は合計9回訪中したが、すべて自費で、指導には報酬なし。最後の指導は車椅子の上からだった。

映画『嗚呼 満蒙古開拓団』で有名になった中日友好庭園(日本人公墓がある)の一角に、「藤原長作記念碑」が建っている。長作没(1998年・平成10年)後、建てられた碑で、高さ2・72メートル。近づいて見ると、碑の冠部にはぐるりと稲の穂が彫られていた。

(武蔵野大学名誉教授)

(たかむらさんは「近現代史検証の旅」にも参加。92頁にも寄稿がある)

# はなつの歳時記

高村 壽一

## ハルビン郊外の深い爪痕

シベリア鉄道は遠くはるかモスクワに通じている。その路線の中国最北の大都会が、黒竜江省の省都であるハルビンである。人口975万人。夏の温度は30度、冬は逆にマイナス30度になる。しかし、人々の顔は経済成長のせいかわる。

帝政ロシア時代の欧州風建築を観て歩くのも一興だが、観光客が集まるのは、冬の一大イベント氷雪祭りだ。中央大街（キタイスカヤ）は一年中遅くまで人々でにぎわう。ビール消費量はミュンヘン、モスクワに次いでハルビンが世界第3位という。車のラッシュ緩和のために目下地下鉄を建設中で、活気に溢れている。

この北の大都会を訪れてこちらも元気をもらったが、旅の日程の一つ、ハルビン郊外（南方20km）の平房地区（ピピンフアン）に行ってみて頭をガツンとやられた。ここに旧日本軍の細菌戦の拠点、関東軍第七三一部隊（通称石井部隊）の遺址が、証拠品類ともに公開・展示されているのである。

現場には「人食い魔窟」の跡と記され、

侵略日本軍細菌戦の最大被災地というような説明がなされていた。戦争犯罪の深い爪痕である。

第七三一部隊はこの地区で1936年から敗戦まで大がかりな細菌兵器の研究・開発を行った。中国、朝鮮、ロシア、モンゴルの政治犯、スパイ、浮浪者などの捕虜（「丸太」と称した）を人体実験し、約3千人が犠牲になったとされている（この数字は誇大という説もある）。

開発実験のために中国各地でベスト、コレラなどの細菌を散布した。関東軍は撤退の際、隠蔽のために特設監獄、人体実験の場など中枢部を爆破したが、ボイラー室煙突、総務部室の建物など周辺部分は遺っており、なお発掘・修復作業も続けられている。日本人として、見るのは辛い、動かせない犯罪遺址である。

「アウシュビッツ、ヒロシマのように世界遺産とすべきで、登録作業が進んでいる」と案内人。その準備の一環か、売られている大判写真冊子は中国・英語版である。

第七三一部隊については森村誠一氏の『悪魔の飽食』三部作が知られている。初版（光文社）には写真誤用があつて話題になったが、今は訂正されて角川文庫に収録され、取材ノートを含め全容を知ることができる。現場に佇むと、戦時の集団狂気にあつた痛撃される。

「戦争なのだから」「お国のためだった」という声も聞く。しかし、ひとたび戦争が起これば、大きな渦に巻き込まれ、個人の自覚など消滅してしまう恐ろしさは消えない。

第七三一部隊の上級隊員は、帰国後も「秘密を漏らすな」を合言葉になぜか生き長らえた。彼らは高度な細菌技術・資料を米国内側に提供したために「戦犯免除」になつたと憶測されている。

戦後は終わりではなかった。その後の朝鮮戦争、ベトナム戦争などで米軍が用いた細菌兵器には、旧日本軍の技術の応用があつたとされている。

さらに「人間の生命を自分（個人）の医学の素材視する思想は、日本の医学界に今も生き続けている」と指摘する識者もいる。ハルビン郊外の「集団狂気」は、60年以上前の悪夢だと忘れ去るわけにはいかない。

（武蔵野大学名誉教授）